大分県芸術文化振興会議会報

芸振

No. 32　51. 9

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・辻　英武　編集人・衛藤　久

風土と大衆の中に

—地域に根ざす文芸活動を望む—

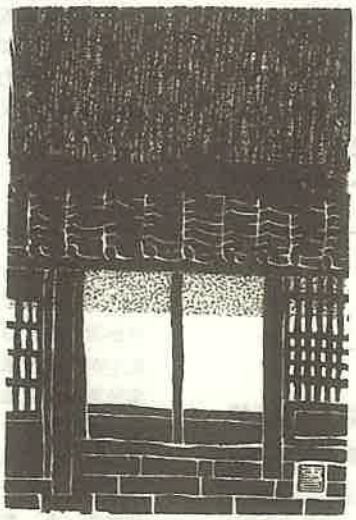
県芸振会議副会長　挾間正年

「青年は未来を語り夢を抱くい」つまでも青年の様な夢を創作し続けたいものです。

大分県の芸術文化は今日ほど活発で郷土に定着している時はないと感じさせられます。斯く評価できるのも機関紙「芸振」のもつ成果のお陰でありましょう。「芸振」は一視点の一部門のみならず他部門への広範な視野を展開させてくれるからです。

文芸とは一般に難しいものと思われていますが、大衆に興味を持たせ生活の中にとけこみ、生活にうるおいを持たせる身近なものにしていきたいものであります。

広範囲な文芸部門は小説、詩、随筆、短歌、俳句その他、ともすれば自分達のみの殻の中で自らを慰め楽しみ探究して行くという姿があります。それは専門的探究かもしれませんが、文芸の大衆への浸透と同好者の指導の在り方等に視線を向け、その「難しいもの」と言う文芸観念によき答を与えて戴きたいものであります。大衆の中にとけこんだ文芸は高度な専門家的なものでなく豊かな人生の為めのものでありたいものです。



ひざし　寺司勝司郎
白日会会員・日版会会員

文芸において「地方」とか「中央」とか言うこの言葉もいやなものです。その内容とレベルに当然差はあってしかるべきですが、何も中央に対して劣等意識を持つことはないと思います。とかく地方と言われる地域に住む者の宿命とでも言えそうであるが、地方は地方の風土と伝統を大切にした中に良さが見出されるのであって、これを大切にすることで地方文化の中に新しい創造が見出されるのであります。

大分県は昔から文人墨客を数多く輩出し、現代でも文壇、画壇をはじめ工芸、音楽界に於て第一線の県人芸術家が活躍していることは、県人文化伝統の高水準を示すものではないでしょうか。

先般私は大分県訪中使節団の一員として中国に渡り、私の立場から凡ゆる面を観察し勉強させられたものでした。中国の文芸が大衆によく浸透しており、その指導は個人差のある大衆文芸の底辺を拡大し、また中央、地方の意識観が出ていない。これは広大な大陸に生きた革命の為めの文芸がそうさせたのかも知れないが、新しい活力を感じさせられました。

幸い大分県には豊富な内容を誇る県立図書館と、来年度完成される芸術会館等身近かに希望と夢を満たされる場所があります。舞台芸術、展示芸術等の華麗な芸術もこれから大きく生れることでありましょう。

少は大きく楽しいものでありたい。

大分県文芸の夢

県文壇

大分に欲しいもの

小　郷　穆　子
別府栄光園乳児院長・詩と真実・東九州文学同人

ある夜、心優しい友人の一人が、思いつめた声で電話をかけてきた。

「東京に行こうなんて気を起こさないでよ。別府にいて書き続ける訳にはいかんの？」

相手が大真面目なのに悪かったが、私は思わず声をたてて笑ってしまった。

「大丈夫、大丈夫。私は豊後のかたつむり」

これが、その時の私の答である。

この友人の素朴な電話に端的に表現されているように、地方では創作活動をやっても芽が出ないという考え方が、大方に浸透しているのではあるまいか。たとえそれが事実であっても、私には郷土を捨てる気は毛頭ない。

かつて私が小説を書き初めた頃、この大分の地には、拠るべき牙城もなく、頼むべき大樹の蔭もなかった。そこで首藤三郎氏が、熊本の「詩と真実」に紹介して下さった。

「詩と真実」は毎月発行して、現在は329号。熊本の牙城としての伝統と歴史を持っている。

そして多くの同人(書き手)と維持員によって、自分達の文芸誌だという誇りと、連帯感によって支えられている。

モッコス諸氏は人情厚く、物心両面の援助をし合うし、切磋琢磨し合うので、挫折しかけても、人生意気に感ずる型の人間は、筆を折る訳にはいかなくなってくるのである。私が「詩と真実」を「我が母なる大地」と呼ぶ所以である。

大分の文芸を語るのに、熊本礼讃のような形になってしまったが、私は、この同じ志を持つ者という連帯感と人情と情熱が、この大分の地にも欲しいと思うのである。

狭間久氏に教えていただいた、現在での県内の同人誌を列記してみよう。

「東九州文学」「邪馬台」「軌道」「文芸風土」「文礫」「檗」「大分文学」「沖代文学」……まだあるのかも知れない。

福岡と言えば「九州文学」を思い、熊本と言えば「詩と真実」を思う。ところが大分は狭間久氏の「小藩物語」の如く、同人誌もまさに小藩分立。私はなにもこれを統合したらよかろうなどと言うつもりはない。

これらが定期的発行を重ねて、大分のもの書きの牙城となるべき実力をたくわえて欲しいと願うものである。

また、他県では県や新聞社が、文学賞を設けたり、経済的援助をしたりして、文芸に対する理解度が高い。県民全体の理解が高くなり、読み手が多くなれば、書き手は振い立つものだということを、理解していただきたいものだ。

[redacted]

県歌壇

先人の足跡を原点として

小　原　由岐雄
県歌人クラブ理事・日本歌人クラブ会員

今夏も妻と万葉の旅に出た。そして、山の辺の道を逍遥した。山の辺の道は、三輪山の南西麓、桜井市金屋付近にはじまって、北の奈良方面まで、大和平野の東側の山裾を、聚落から聚落へと、山の畝尾のままに、うねうねとまがりくねりながら、自然に出来あがった古代の道である。額田王、丹波大女娘子、中大兄皇子、柿本人麻呂、その他多くの万葉の歌人が遺した足あとを辿り、その足あとに立ち、夢らしからぬ極めて現実的な夢を見た。万葉の歌人たちは、今日の私たちと同じ人間として、同じように物を見、同じような事を思って生きたであろうと、私は私の旅懐に現像し、その現像の上に夢を見たのである。

未来にしても、夢にしても、所詮、現実から離れてはあり得ないのではないか。私の夢は、常に「大上段にふりかぶることのない刀」である。私の尊敬する浅利良道先生が作歌を始めたのは19才。私の所属する歌帖の前主宰故葉山耕三郎先生は15才で作歌を始めている。不肖の私でさえ15才で詩歌を詠むことを学び知った。当時、大正から昭和にかけて、大分県の詩壇、歌壇の中心となって活動した人たちの殆どが20代を中心とする10代から30代であった。農村でも、都市でも知識層の多くは短歌或は俳句のささやかな会合をもっていたのである。勿論作歌をたのしむ人の年令層は厚く、特に若年層が多く、今日の年令層が薄く、老年層にかたよっているのとは対照的である。何故に――。

私たち歌人、文化行政および教育にたずさわる者は、古人、先人、先輩、とりわけ自分自身の足あとに謙虚に立ち、未来への展望を行うべきであろう。肩肘張らずに芸術文化にたずさわる者自身が、みずからの過去、現在の芸術文化活動を反省しなければならない時である。

[redacted]

県児童文学

進めたい「児童文学の町」づくり

佐々木　均太郎
大分子どもの本研究会長・大分大学助教授

大分県における児童文学の伝統は決して薄いものではない。例えば、久留島武彦先生が童話に尽された功績は日本だけではなく、アンデルセンの国デンマークにまで及んだ。先生の出身地玖珠町には童話碑が建てられ、久留島児童文学賞も設けられているが、特に玖珠町が毎年子どもの日を中心にして行う「日本童話祭」は年々盛んになっている。一昨年はアンデルセンの生れたオーデンセの市長さんも臨席され名実ともに国際的行事になろうとしている。

こうした深いゆかりを基礎にして、将来玖珠町を日本唯一の「児童文学の町」として宣言発展させたいものである。幸に現玖珠町長さんも「夢とロマン」を好まれ、その気充分と承っている。ここに本格的「児童文学館」をぜひ建ててほしい。そこを訪れれば、児童図書はもちろん、あらゆる児童文化施設と遊び道具もそろい、児童文学の文献資料がコレクションされているというふうに。「童話の国」玖珠町の実現は決して真夏の夜の夢ではないように思う。

最近、お母さん方の児童文学によせる情熱もまた格別である。昨年大分文化会館で「全国子どもの本研究会」を開催したのを契機に母親や幼稚園の先生方の子どもの本研究熱が急激に高まった。今では隔月に研究会を開いている「大分子どもの本研究会」の会員は200名を越している。児童文学の研究と、実践にこんなにまで母親たちが真剣になっている姿は目をみはるものがある。いまお母さん方は、子どもの本300冊を読了しようというのが合コトバになっている。すでに創作をされている母親も出てきて、後藤栖根（大分市出身）主宰の児童文学誌「童話」に入選掲載された作品もある。

ことしの8月には作家の加古里子先生・福音館社長などを招き夏期大会を催した。300名に近い母親たちの参加で大盛会であった。大分県の児童文学運動が今やお母さんたちの手で広げられ高められていることは画期的なことといわなくてはならない。

さらに、大分県は民話の宝庫でもある。昨年「大分の昔話」（県小学校国語研究会編）が刊行され好評だった。これからもローカル色豊かな民話が掘りおこされ、新しい児童文学として発展させられていくことも大いに期待される。大分県の児童文学は再び隆盛期を迎えようとしている。

（[redacted]

県高文連

若い芽を育てつつ

木　本　数　一
県高文連会長・大分女子高校長

「高文連」（大分県高等学校文化連盟）の文芸部の生徒諸君は、毎年夏休みに、別府の城島高原で開催される「文芸部研修会」（高文連文芸部主催）をとても楽しみにしているようだ。その1泊2日の日程のなかには、部活動報告、講演、作品合評会、交歓会などが組み込まれており、かなりのハードスケジュールであるが、目的を一にする生徒たちのエネルギーが、顧問教師たちの熱意に支えられて、有意義なひとときが生み出されていく。他校の様子を尋ね、自他の作品を評しあいながら、そこに得るものは、時に自信であり、時に発奮であり、時に省察であったりするわけだが、お互い同志の励ましあいになるとともに、学校に帰っては、部員たちの強い結びつきと意欲をつくっていくようである。

学校における諸部の活動は、顧問教師のやる気に負うところが大きいが、そこに育ちあがっていく生徒たちの、先輩から後輩へとうけ渡していくものの大きさには及ばないことが多い。そうした意味で、このような会を大事に守り育てていくことは生徒たちの夢を育むこととなり、地道に描くべき私どもの夢づくりともなる。ただ、こうして育ってきた文芸愛好の生徒たちが、今の進学体制のなかでいかに折りあいをつけながら文芸活動を続け自分の進路を求めていくかは、生徒一人ひとりの問題であるとともに、また指導者の問題でもあって、せっかくふくらみつつあった夢がしぼんでくるのは、この問題との対決が甘いからである。

現に、文芸部員及び一般生徒たちの作品発表の舞台となる「高校文芸」（高文連文芸部発行、年一回）は、夏休みをはさんでの原稿募集を県下の高校にまわすのに、応募校が少なく、一般生徒の応ずる気配はさらに少ない。文芸部のない学校でも、小品とか短歌・俳句などは、国語科教師の指導の具合では、何とか応じられる作品づくりは出来ると思う。発達するマス・メディアのなかでも、「書くこと」の指導はいつまでも大事な分野であり、青年期に心傾けて書くべきは、けっして文芸的なものばかりではない。記録・報告の類、ルポルタージュ、説明文、論文も然りである。この時期に情熱を注いだ行為が人生を左右することは今更言うまでもない。願うことは、著名な文学者の一人二人ではなく、地方に末広がる無名な生活実践者たちの育成である。切実に考えあうならば、ゼミ形式や時間の特設など術はある。時間も人もそこに生まれる。

（[redacted]

県俳壇

俳壇の舞台を地方へ

倉田紘文
県俳句連盟理事・俳誌「蕗」主宰

1975年度版「大分県文化年鑑」（大分県芸術文化振興会議発行）の文芸のまとめの項の冒頭に

大分県の文芸界は、伝統の希薄さもあってか未だしの感をまぬがれない。

と書かれている。なる程そうだとも思い、又淋しいことだとも思った。更に同誌のページを繰り俳句の項に目を移すと

『虹波』は5月、西日本国語俳句大会を主催した。『石』の主幹田原千暉氏によって刊行された「ベトナムとの連帯と支援をうたった俳句集（第1次）」は全国的に好評を受けた。

とあり、ここには外に向かっての情熱的且つ積極的な姿勢が窺えて嬉しかった。

また、私事に亘って誠に恐縮であるが、私が主宰する『蕗』も今では月々の投稿者が千人をはるかに越え、しかもその7割強の人が大分県以外の俳人なのである。

◇　◇　◇

県下には各地区毎に句会があり、伝統俳句・現代俳句を通して数えれば、そのグループは20にも30にもなるであろう。従って俳句人口の増加も著しく、「大分県俳句連盟」の名簿には既に400人に近い俳人が名を連ねている。

◇　◇　◇

こうして県内の俳句界の現状を見ていくと、今や内なる力が徐々に蓄積され脹れて、その勢いがようやく外に向かって迸り始めたように思われる。

これまではどちらかと言うと、「人」も「俳句」も中央へと流れていた。ここらで風光に恵まれたこの大分県を、日本の俳句界の舞台に仕立て、「人」と「俳句」の流れの方向を変えさせたいものである。

（〒874
別府[redacted]

多様性の中の親睦

河野輝暉
新俳句人連盟中央委員・俳誌「石」「塔」同人

(一) 県短文学会館を

東京にも建った俳句会館が大分県にも欲しい。芸術会館が完成されれば、その一室を割いてもらう。俳句専用がぜい沢なら短歌、詩、川柳を入れる。却って他ジャンルが交流できてよいかもしれない。芭蕉は蕉風確立に既成の流儀を肥にし、子規は短歌、俳句をやり、秋桜子は俳句に短歌調を導入したし、私を例にとれば、本は詩を読む方が俳句の本以上に自分を太らせてくれる。今日、余りにも俳句なら俳句の殻に閉じこもって、他の世界を瞥見することは純血を汚すくらいに考えている傾向にあることはよくないと思う。俳句のような蝸牛の角の狭さの中にでも、いわゆる伝統派と前衛派を名乗って2分している。一つは、昔ながらの師匠俳諧を奉じて、他に学ぶことから文盲状態に仕組んでいる。私達はもっと貪欲になり雑種になるため会館に行けば、県内のすべての発行雑誌、句集、評論が見られる様にし、年1回句会をし、俳論展開の場にしたい。仲良く、でなく新しい血を摂取するために。

(二) 市郡別の俳句会

俳句には吟行という独特の作法がある。人生は旅になぞらえれるが、県内で年1回、市郡別に場所をまわりもちで合同俳句会をもつ。大分、別府だけでなく辺地でも出かけて行き、そこの風物人情食物に触れて吟行をし、徹宵の清談をかわし、仲間を増し、もって、エリオットの言ではないが「詩は高級な快楽」とするのである。難の多い俳人を世話する組織が問題であるが、この組織が大きくなると大分文化会館くらいで文化講演を開催し、四国の松山なみの俳句の旺んな大分、の名を欲しいままにしたい、というのが私の夢である。

[redacted]

時だけでも、各部門の代表だけでも集って、無言の中にでもつながる思いを感じ合うというのはどうであろう。

近年演劇部門の進出は喜ばしいことである。小説には入賞ということがあって、中央文壇の何々賞受賞といった役割を果している。これも輝かしいことである。短文学の分野でもこうした機会がほしいと思うが、わたしどもはあくまで受身である。

さて、歌劇の東京公演から大分県はにわかに、文化県の名をあげた。文化県とは、政治も経済も立派でなければならないが、その底にこれを大きく支える文化がなければならないと思う。

[redacted]

田吹繁子
歌誌「八雲」主宰

県　里　謡

伝統的な里謡県として

土　屋　北　彦
「里謡大分」選者

里謡は、発生以来一貫して、話し言葉で作られてきた。このことは、同じ表現表記を採ってきた川柳とともに特筆すべきことである。

短歌・俳句が今日でも依然として文章語使用を主流としているのは、歴史的な様々の試みにも関わらず、話し言葉の表記ではどうしてもその形式に順応できないからである。それは窮極的には発生の源に起因しているのではあるまいか。

里謡が話し言葉で作られてきた理由は、その形式が大いに関係していると思われる。普通里謡は七・七・七・五の26音詩だといわれているが、これを更に細かく分けてみると、三・四・四・三・三・四・三・二というリズムになる。同じ7音でも四・三と分けると文語調になるのである。

三・四という謡い出しは、日本語の日常会話語のほとんど全部に共通して用いられるリズムで、四・三以下のつなぎの部分とともに基本的に話し言葉による詩の構成要素となる。

里謡がこうしたリズムをもつ詩型であることが、口語表現を抵抗なく受け入れる原因となった。話しことばによる短詩成立の所以である。

時代がすすむにつれて、詩一般が次第に目から耳の文化へと移向して行くと思われる。そうした時代を先取りする詩型として、今後里謡の存在は、ますますその重さを加えるものと私は思っている。

全国的に眺めても、里謡の作家は極めて少ない。各県別にみると、茨城・岐阜・福島・高知・山口・大分などが比較的里謡の盛んなところで、その他の県には数えるほどしか作家が育っていない。伝統的な里謡県としての大分県里謡の作興のため、今後とも私なりの微力をいたしたいと念じている。

提言

芸術の輪をつなごう

県芸術祭も今年でもう十二回をむかえる、わたしども短歌部門でも、この間毎年短歌コンクールと短歌を語る会、その他さまざまな行事をもって、県文化の一翼をになってきた。しかしそれは作品の優劣をきそうばかりであった。それもこれまでは午後から開いたが、来年は午前中からはじめて、時間的なゆとりをもち、今少し多くの人の集りをと検討中である。又別にその作品を朗詠するとか、短冊に書くとか音にも形にもしてみたらとも思っている。

県の芸術祭は各部門個々の発展方向に進むべきであるが、それはまた県下の総合芸術として、横に一本つなぐものをほしい気がする。これまでのように他の部門とは無関係というのではなく、せめて開幕や閉幕の

県　柳　壇

新芸術会館での文芸活動を

疋　田　青　峰
番傘川柳本社同人・県川連同人部長

芸術会館設立の噂は聞いた記憶があるが己に10年も前の話とわかり、関係者の熱意と根気に改めて深い敬意を感ずる。とともにその建設工事が着々と進行している現実に喜びもまた一入である。

僻目かもしれぬがこの種の建物は外観にウエイトが置かれ、殊更に美観を誇るものが多く、その分だけ内容面が落込む嫌いがある。芸振31号に掲載された会館の、設計図や工事概要によると素晴らしい劇場や展示室の外に、会議室・講堂特に講座室などの文芸部門でも活用できる施設設備が完備されるだろうことが想像される。

文芸分野は地味で活動も一般の人目につき難く、従って忘れられ易いのだがその点に十分の配慮がなされるよう期待してやまない。

同好者の倍増や若い世代の導入など、新人後継者の育成に今後の躍進が目ざましいという楽しみが滾滾と湧いてくる。

川柳はその社会的評価に些か不満があるが現在県下各地に川柳会が発足しており、その数12大分県番傘川柳連合会の傘下に結集し300余名の正会員と機関紙高崎山の誌友、その他大会出席者など概算1,000名余の同好の士が居るのである。

番傘川柳本社は大阪にあり、そのもとに全国各都道府県は勿論、アメリカ在住の同人、誌友もあり、数百の吟社数万の川柳人をその傘下に抱いている。他派との大同団結は「日本川柳協会」であり、その事務所も大阪にある。

川柳の古典「誹風柳多留」には数百万句の中から選び抜かれた二万余句が集録されている由である。大衆の詩として親しまれ愛吟された古川柳は、現代川柳として装いを新たにし短詩型文芸の一角をにない、形成内容共に著しく脱皮しているのである。往時の盛大には至らぬ迄もこの人間諷詠の詩、無から有をうむ17音の短詩同好者の倍増を願っているのである。

県詩壇

芸術創造のための回路システム

長谷目　源　太
九州文学同人

〃夢〃、〃芸術文化への夢〃を、文学、特に現代詩の分野、立場から描くというのは、これは非常に難かしい課題である……。

「夢」、「ビジョン」……「芸術」、「文化」……、当世は、何でも、芸術や文化が、まるで定冠詞のように乱用される時代だから、文学、現代詩にとっての〃夢〃などでなく、また創造的な営為としての芸術文化のあるべき姿の模索などでなく、とにかく漠然としたわたくしたち市民にとっての、いわゆる文化的未来像についてであれば、それならいささか愚見も申し述べることもできようと、筆を取った次第。

〃下部構造が上部構造を規定する〃か、どうか、わたくしは確かな論拠を持たないが、これからの時代が、「物」から「心」への変容を遂げるであろうことは明確である。かく、すべての社会活動、あるいはその価値観が、物質文明より精神文明の充実を合い言葉とするようになれば、当然のようにまた、行政なども、それに即応した施策や事業を展開するようになる。

いま、教育界を中心に、人間回復、生涯教育のプログラムが真剣に検討されている。芸術創造の活動を、行政の領域でのみ把（とら）えることには大いに問題もあるが、しかし、すべての市民が文学や音楽、絵画などの芸術創造に取り組み、批評、鑑賞するに当たって、積極的な便宜やサービスの提供を図ることは、極めて重要な意味を持つ。詩や小説を専門とする文学者、あるいは絵かきたちは、個人、集団ともに、必ずといってよいほど、困難、かつ不遇な状況下、黙々と創作活動に励んでいる場合が多い。

よく〃金を出して、口を出さぬ〃文化行政のあり方が問われるが、そうした傾向が一生半可にではなく、真に徹底して実施されることが期待されるのだ。質的に充実した、高い水準の文学作品が生まれるためには、創作人口の増大、文学的底辺の広がりが、要件となる。専門的書き手や、特定の文学集団の増えることも大切だが、県民のあらゆる世代を通じて、一人でも多くの書き手の育成こそが肝要である。

そして、さらに望ましいのは、そうして生成された文学作品が、他のジャンルの人々、あるいは県民一般によって、より広く批評され、鑑賞されて行き、それがまた芸術創造の成果となって結実する、いわば回路システムの出来上がることが望まれるのだ。こうしたわたくしの念願は、夢というより、今日の大分県における文学活動への反省であると言ってよいだろう。

[redacted]

第12回大分県芸術祭行事（主催・共催・特別参加行事）

期　日	行事名称	会　場	主催団体
10月1日(金)	一大分県のうた一　合唱音楽の夕べ	大分文化会館大ホール	大分県合唱連盟
10月3日(日)	第12回短歌コンクールと短歌を語る会	大分県婦人会館大ホール	大分県歌人クラブ
10月17日(日)	第10回大分県俳句大会	大分県社会福祉会館大ホール	大分県俳句連盟
10月24日(日)	第8回大分県川柳大会	大分県教育会館大ホール	大分県番傘川柳連合会
10月21日(木)～10月25日(月)	第12回大分県美術展覧会　書　道	大分文化会館第1･2小ホール	大分県美術協会
10月27日(水)～11月1日(月)	〃　日・洋・彫・工	〃	〃
11月11日(木)～11月16日(火)	〃　写　真	トキハ8階催し場	〃
10月3日(日)	都山流尺八九州連合大会	大分文化会館大ホール	都山流尺八楽会大分県支部
10月4日(月)	音楽の夕べ	大分文化会館大ホール	大分県職場音楽連盟
10月7日(木)	オペラ「魔笛」	大分文化会館大ホール	大分県民オペラ協会
10月2日(土)	一日本舞踊研鎖一　素踊りの会	大分文化会館大ホール	大分県日本舞踊連盟
10月31日(日)	大分県洋舞踊協会合同公演	日田市民会館大ホール	大分県洋舞踊協会
10月10日(日)	一県民演劇一　貧乏神・山弥長者物語	大分文化会館大ホール	大分県民演劇制作協議会
10月23日(土)	大分県演劇祭	杵築市民会館大ホール	杵築市教育委員会・大分県高等学校文化連盟・大分県連合青年団・県民演劇制作協議会
11月30日(火)	二豊の祭り唄と、ふるさとばやし	大分文化会館大ホール	大分県民謡研究会
10月7日(木)～10月11日(月)	大分合同諸流いけばな展	トキハ8階催し場	大分合同新聞社
10月8日(金)～10月17日(日)	田能村竹田とその一門・豊後南画展	大分文化会館第1･2小ホール	大分合同新聞社
11月7日(日)	表千家同門会南九州大会協賛茶会	宇佐神宮	大分合同新聞社
11月21日(日)	大分合同三曲名流選	大分文化会館大ホール	大分合同新聞社

波紋

一七年の歴史をもつ大分県短文学大会は、今年は八月八日例年どおり豊泉荘において盛大に開催された。まことに御同慶にたえない。わたしは、その日が甲子園の高校野球と重なったため、今年初めて豊泉荘を欠席した。

正直いって、甲子園に出向いてよかったと思った。甲子園では、短文学大会のようないささかマンネリ化した場では味わい得ない、鮮烈な印象と刺激があった。現在を克服してひたむきに未来へ挑戦しようとする若人たちの姿を見て、文芸とスポーツをストレートに比べるわけではないが、高令化の著しい今の短文芸の世界には、青春のみずみずしさ、鋭い生への意志、さらには庶民が共通の感激を持つ喜び、そういうものが欠如しているのではないか、と思われてならなかった。

川柳にしても俳句、短歌にしても、短文芸の世界ではとかく「これほどの価値ある文芸を分からぬのは縁なき衆生」とばかり他のジャンルや流派を相手にせず、自分たちだけのテントにこもってしまう傾向がある。しかもテントの中で、

短文芸の炎を燃やそう

田村卓夫
番傘川柳社同人・大分上野丘高校長

他のテントの悪口を言い合っている。もちろん「スナップショット的にとらえる俳諧精神」や「短詩型という様式上の制約」がある以上、感覚的な共通経験を持つ者しか悟り得ない、いわゆる「座の芸術」としての狭さは、宿命的なものなのかも知れない。だとすれば、それだけに、積極的に広場に出て同じ炎を囲む勇気が必要なのではないだろうか。

短詩型文学は、いわゆる限界芸術（生活芸術）の領域に属する。専門家ではないアマチュアが、生活や労働の中で道を求め、美をつくる創作活動、それが日本人の短文芸である。「身辺のことを詠めば、月並な作品でも容易に活字になる」という魅力が現在のブームの原因だなどとは決して思いたくない。郷土の短文芸を生活に密着した生活芸術として高め、広げるために、時には流派を超越した「文芸の広場」で話し合う機会を持ちたいものである。その場合のテーマは「何が可変であり、何が不可変であるか」が最も適切であろう。

本来、詩人の精神には、新しいものを寄せつけまいとする狭さはなかったはずである。

[redacted]

県下で発行されている文芸誌

※県立図書館に送られているもの

○文芸誌

耶馬台	同発行所	季刊
文礫	別府文学サークル	不定期
文芸風土	同事務局	〃
板山文芸	板山文芸同人会	〃
軌道	奈賀博史	年2
響	由本義明	季刊
渓旅	柳原康男	〃

○詩

心象	心象社	季刊
門	門詩友会	隔月刊
地核	板井蓮生	不定期

○短歌

歌帖	歌帖社	月刊
大分アララギ	大分アララギ会	季刊
八雲	八雲短歌会	月刊
朱竹	朱竹短歌会	月刊
大分歩道	大分歩道歌会	季刊
しらゆり	田島須磨子	月刊
竹田短歌	竹田短歌会	隔月刊
げっしゅう	村上富六	年2
風	風短歌会	隔月刊

○俳句

虹波	虹波社	隔月刊
石	石発行所	季刊
蕗	蕗発行所	月刊
大分ホトトギス	大分ホトトギス句会	季刊

○川柳

川柳高崎山	大分番傘連合会	月刊
川柳湖風	湖風川柳会	月刊
川柳ふない	大分番傘川柳会	季刊
川柳つるさき	番傘つるさき川柳会	月刊

○里謡

里謡大分	大分県里謡作家連盟	季刊

○年刊集

大分県詩人協会報	県詩人協会
大分の文芸	県教育委員会
大分県短文学会作品集	県教育委員会
大分合同文芸年間賞作品集	大分合同受賞者の会
大分県短歌作品集	大分県歌人クラブ

昭和51年度・52年度　会報「芸振」編集計画

◎編集テーマ

「大分県芸術文化の夢をえがく」

大分県芸術文化の未来について、希望、展望、設計、指針、夢想する。

※過去の編集テーマをふりかえると、45・46年度は「県芸術文化の現況と課題」／47・48年度は「県地域芸術文化活動の振興を計る」／49・50年度は「昭和20・30年代の県芸術文化活動を回顧する」となっている。

△51年６月発行　特集「大分県立芸術会館の夢」
△51年９月発行　特集「大分県文芸の夢」
△51年12月発行　特集「大分県音楽の夢」
△52年３月発行　特集「大分県の生活芸術・地域文化活動の夢」
△52年６月発行　特集「大分県芸術祭の夢」
△52年９月発行　特集「大分県舞踊の夢」
△52年12月発行　特集「大分県演劇の夢」
△53年３月発行　特集「大分県美術の夢」

ニュース

◉９月22日（水）　県演劇祭事前打合会開催。10月23日（土）９時から杵築市民会館において　。いとしのいとしのぶーたれこじき（県立杵築高校）　。弥太郎渕（前津江村青年団）　。貧乏神（県民演劇）の上演について打合せを行った。

◉10月１日（金）　大分県芸術祭開幕、18時30分から大分文化会館において「合唱音楽の夕べ」の公演、大分県合唱連盟。

◉10月29日（金）　18時30分から津久見市民会館において九州芸術祭行事「邦楽による九州ファンタジア」北原篁山等「邦楽４人の会」の公演。

◉11月30日（火）　大分県芸術祭閉幕、18時から大分文化会館において「二豊の祭り唄と、ふるさとばやし」の公演、大分県民謡研究会。

◉12月７日（火）　18時から日田市民会館において文化庁移動芸術祭巡回公演「炎の人　ヴァンゴッホの生涯」劇団民芸　滝沢修ほかの公演。

県芸術会館運営委員会開催（９月21日）

来年10月１日開館予定の行事について次のような要項が審議・検討された。

◎記念展として「大分の美術千年展」

(1)　大分の仏教美術
(2)　武家と美術
(3)　南画時代より現代美術まで

◎第８回日展（大分展）

◎文化庁移動芸術祭（交響楽・歌舞伎・ミュージカル）の誘致等。

編　集　後　記

「芸術とは破壊の集積である」と言ったのはピカソであったが、棟方志功は「芸術とはもっともあたりまえのものでなければならない」とも言った。

「芸振」32号からは大分県芸術各ジャンルの夢を企画していく。新しい感覚の提言・箴言を会員の各位に期待したいものである。今回は文芸総合誌部門の原稿が間にあわなかったのが残念でならない。（F）

かわの眼科

河野　彰

大分市府内町２丁目５－９（トキハ北口通り）

ＴＥＬ　大分（0975）32－2480
時間外　36－7547